

習作時代の Jonathan Swift

Some Observations of *Ode to the Athenian Society*

難波俊裕

(岐阜薬科大学教養科英語英文学)

Synopsis

Jonathan Swift in Apprenticeship

Some Observations of *Ode to the Athenian Society*

TOSHIHIRO NAMBA

English, Department of General Education, Gifu College of Pharmacy

(Received September 11, 1976)

Swift could not find the form of Pindaric Ode congenial with him though he had employed it for some years and he seems to have left it for freer exertion of his genius. But critics like J. M. Murry think much of those composed in his apprenticeship because of their autobiographical values.

The present writer, who has studied on the analysis of *A Tale of a Tub*, is now interested in these odes and tries to shed some light on the satiric devices by which Swift achieved the literary effects that might satisfy him.

The Ode to the Athenian Society has been studied rather exclusively with necessary sidelong glances to the other works of this period. The ode is composed of two axes of imagery, Deluge-War and Society-Unknown. Thoroughly examined, they are mere external structures, though intricately woven into the texture of the poem, those serving for the frame of satire.

What Swift is really concerned with is nothing but the 'disturbances in learning and religion' such as are to be treated in that masterpiece of prose satire.

The satiric renderings consist in very fine modulations of the two sorts of frame imagery. By ever disguising either or both, a new point of view can be obtained towards the objects to be satirized so that Swift can bring about varieties of banter, ridicule, invective and so on, because the varying interrelations between the aims and the view-points, the ever changing mutual distance, in my term, serve considerably for the targets to be made deformed or exaggerated figures. So one can appreciate the satiric effects by the degree that one is able to see the covert basic images through surface layers which thus are modulated though not coherent.

This conclusion may be safely said to be in keeping with the remark done by I. Ehrenpreis on *A Tale of a Tub*.

Ode to the Athenian Society (1692) は習作時代の唯一の印刷された詩であり、Dryden の酷評と Swift の自信喪失の挿話の基になったものである。しかし、Swift は日常生活から生ずる鬱積を¹⁾発散させるために韻文をもちいた。これらは親しい友人に見せるためのもので、必しも出版を目的とするものではなかったが、詩作は晩年まで続

いた。

A Tale of a Tub の関連で考えると、創作時期が平行していて題材が政治的・思想的である点が共通している。1693年までのグループの他の詩と異なるのが、この詩の特色であり、また取り上げた所以である。それ故、当然ではあるが、*A Tale of a Tub* の特色がみられる。この詩は、思想的結論とも言えなくもない、最終の paradoxical な存在認識で終る。

How strange a paradox is true
 That Men, who lived and died without a name,
 Are the chief Heroes in the sacred list of Fame.

(the author's italics)

これは *A Tale of a Tub* の著明な paradox と響き合うものであろう。

…… He that can with Epicurus content his Ideas with Films and Images that fly off upon his senses from the Superficies of Things; Such a Man truly wise, creams off Nature, leaving the Sower and the Dregs, for Philosophy and Reason to lap up. *This is the sublime and refined Point of Felicity, Called, the Possession of being well deceived; the Serene Peaceful State of being a Fool among Knaves.* (my italics)

1

まず、この詩全体を展望しておく。

創世記の大洪水と箱船を下絵に、アイルランドの動乱と回復の表絵を重ね合せるのが stanza I である。

Learning の一族が箱船に乗って避難する。やがて水が退いて箱船は陸地につき、鳩が飛び立って様子を探ぐる。嘴に月桂樹の葉をくわえている鳩は、*The Athenian Gazette* を表わし、a laurel leaf はこの Swift の詩を表わしている。¹⁾

続く stanza II では、鳩に託して Swift 自身のアイルランド帰国と英国行を織り込んでいる。その中で 'an humble Chaplet' というのは *Ode to the King in Ireland* を指す。逃避の原因となった戦争を「洪水というよりは灌水」であるとして、視点の転換をおこない、アイルランドを「花咲く楽園の島」と呼ぶ。Swift はここでは鳩であり同時に詩の靈感でもある。その鳩が聞く「天上の音楽」は Athenien Sociaty への讃辞と考えるべきである。²⁾

stanza III の冒頭で 'The great Unknown and far-exalted' に、自我自讃も含めた誇張した描写を謝罪するが、善意からでた称讃であって悪意はないとも主張する。加えて、「非難は選ばれた者の権威を示す徴でもある」とも弁明している。匿名の Athenian Society をいくら攻撃しても効果があがらないため、時流にのった自由思想家 (Wits) は協会が存在しないとも主張する。新奇を追い、大衆が愛着をもつものを忘れていて、当世風を思想を軽蔑しているのが Athenian Society である。

称讃にしろ侮辱にしろ価値が定ってはじめて可能である。価値が混乱している時は行為の判断は難しい。「名誉とは何か。どこに求めればよいか」と呼ばざるを得ない。⁴⁾これに代えて、'heavenly Wits' が信じている美德と宗教が尊ばれて、術学が最も軽蔑されているところ (Athenian Society) に価値の基準を求めよと提案する。

この協会の功績は疑問を懐くものにも、「真の知恵」による明解な解決を与え (stanza VIII) 術学の偽りの装をまとった「哲学」から虚飾を取り去った点にある (IX)

ところが、詩人には不満が一つある。詩の女神は詩人の心を魅惑し盲目にする。その点では協会も共犯でないとは言えない。「命を奪う不滅の 'Wit' で不幸の火を燃えあがらせようとする。残忍な無名なる人々よ、狙いはいったい

何んだ」この憤りの原因は協会の機関誌のなかで、Platonic Love が説かれているためであろう。⁶⁾ その思想にかぶれた女は男をないがしろにし弄ぶ。女の地位を高め「王国を築く」のはほかならぬ男である。⁷⁾

この唯一の欠陥は協会さえも高い理想を維持しえないかと、詩人を慨嘆せしめる。立派な成果は「人の生涯の真昼の太陽のように頂点に達すれば、たちまち、長い憂鬱な夜と替わる」盛と衰、達成と崩壊、完成と墮落はこの世の常であるが、「崩れた廃墟でさえも、未来に、『名もなく生き、名もなく死んだ人こそ、名誉の列伝の中で貴重な英雄』という、なんと奇妙にも逆説の真実を示すことであろう」⁸⁾と結ぶ。

2

Swift はほとんどこれと同じ時期に Ode 二つを作っている。Ode to Dr. William Sancroft と Ode to the honourable Sir William Temple である。

二人の人物に頌詩を捧げた理由は、「究極の真理は人間には知り難い。だから人間は真理を見失わないためにも、真理の体现者、人格化した真理を欠かせない」というものであろう。Lorb Archbishop of Canterbury であった Dr Sancroft が王の要請にもかかわらず屈辱に耐えて信条を捨てなかったことに「人格化された真理」を Swift は見出した。また当時、書記として仕えていた政界の混乱を嫌って退いた、この老政治家に、保護者に対する恩義ばかりでなく文芸と政治に関しても強い影響を受けている。Sir William は Swift の「精神の父」として存在した。「不毛の宮廷を啓蒙しようと努められましたが、無為に終わりました。畑の方が、あなたの貴い苦勞に価するまででありましょう。だから人類は倒れ、だから人類は起きあがるにちがいないのです」⁹⁾と農本主義者 Sir William の政治理念を高く評価している。この二つとも、人格化した理念に対する讃辞と尊敬である。一方、Ode to the Athenian Society は世論に対する文学的対応である。Swift の後半生における活動が St. Patrick's Cathedral の Dean であり、あるときは中央政府に、あるときはアイルランド政治に、政治の周縁に位置する作家としての活動であったことを考えると、ここに「伝記的価値」が強調されるのも当然である。¹⁰⁾

Ode という詩形が Swift の気質に一致しなかったことは諸家が指摘するとおりであろう。事実、30才前後(1694年~1697年)詩作は中断し、再度詩の創作を始めたときは Cowley の影響から脱していた。この詩を読んで詩才を否定した Dryden への遺恨も重要であろう。

気質になじめなかったのは、Ode 形式は stanza が長く行数が整わなく、リズムも不整合であり、詩情を持続するには高い調子を盛り上げなければならないからという理由を Denis Donoghue は挙げる。¹¹⁾

Donoghue に従えば、小単位の並列、厳格な均衡と裁断が Swift の詩の基本をなしている。¹²⁾ その結果、詩には鮮鋭な判別、対句表現、合理的なものへの信頼という特質が生まれ、さらに、非合理的なものへの反発から諷刺的気分が、毒舌(invective) からかい(railling) 質の転換、反語的修辞を素材に、醸し出される。¹³⁾

たしかに、習作(prentice work)ではあるが、Cowley の影響で書かれたこの時代の頌詩が Yeats の後期の作品に影響したことも Yeats 自身が語っている。とすれば Ode to the Athenian Society 個有の構造を探ることも無駄ではあるまい。

3

詩の全体を展望したとき、二つの主題に触れておいた。戦乱=洪水、と協会=真理の両軸である。この二軸の Imagery を詳細にたどることが有効であろう。

France に身を潜めていた James II が1689年イギリス王位を回復しようとして、Catholic 教徒を頼ってアイルランドに上陸した。しかし、いちはやく国王 William III は戦備を整え、翌1690年に Boyne の戦いで James II

軍を撃破し、やがて、John Churchill の卒いるイギリス軍が Cork と Kinsale を奪回する。更に、敵に制圧さ
れていた英仏海峡を海軍もまた奪回するのである。¹⁴⁾

これを stanza I ではノアの洪水伝説の枠組に則して描く。

So after th' Inundation of a War
When Learning's little household did embark
With her World's fruitful System in her sacred Ark,
At the first Ebb of Noise and Fears,
Philosophy's exalted head appears. (ll.12—5)

(大意：学問の小家族が聖なる箱船に実り多き世界観をのせて船出した戦乱という洪水のあと、昔と同じよう
に、喧騒と恐怖が鎮まるとすぐに、哲学の高邁な頭があらわれる)

聖書で保護されることになっている Noah の一族は神の教理の実践者である。イギリス国家の基本、国教的理念
が、この詩では強調されている。最初に頭を出した 'philosophy' も、国教理念に矛盾しないもので、自由思想的な
ものではありえない。両イメージの重層は比較的調和している。

これが stanza II に引き継がれると、転調が起る。

…… see the Country all around
Where fatal Neptune ruled erewhile,
Scattered with flowery Vales, with fruitful Garden crowned
And many a pleasant Wood,
As if the Universal Nile
Had rather watered it than drowned. (ll.38—43)

(大意：今まで恐い海王が君臨したにもかかわらず、花咲く谷が散在し、果実をたたえた園と多くの美しい
森を戴いている。普遍のナイル河に侵されたというよりも灌水されたかのようなこの国の隅々まで見渡
¹⁵⁾
す)

'Deluge' → 'inundation' → 'Neptune' → 'Nile' という連想の軸にイメージを展開することにより、侵
略者 (Jacobites) → Modern thinkers → 観念指向という隠された、描かれているものとは異質の連想軸を
読者が喚起することを要求するのである。この転換は、後に、善性、悪性の2種類の不品行 (Impertinence) に移
る契機となっている。内容もこの軸から逸脱する。

戦乱=洪水のイメージが stanza VIII に至って再度登場する。

敗北したカトリシズムと新興の Natural Philosophy を重ね合せ、二度目の逃走を余儀なくさせられた James II
が諷刺される。

The Jugling Sea-God when by chance trepan'd
By some instructed Querist sleeping on the Sand,
Impatient of all Answers, straight became
A Stealing Brook, and strove to creep away
Into his Native Sea,
Vext at their Follies, murmured in his Stream;
But disappointed of his fond Desire

Would vanish in a Pyramid of Fire. (ll.89—96)

(大意：詐欺師海神を、例のあらゆる答を聞きながら、通報を受けていたが砂に眠り込んでいた、質問屋がたまたま捕えた。海神は、たちまち、こそこそ逃れる小川にかわり、流の中で囁かれる愚かな話に腹を立て、やっ和海へと這っていった。だが、その馬鹿な野望はくじけ、結局、焔のピラミッドの中で破滅するだろう^{a)})

後段は侵略者の逃亡の主題が支配的になる。

This Surly, Slipp'ry God, when He designed
To furnish his Escapes,
Ne'er borrowed more variety of Shapes
Than You to please and satisfy Mankind,
And seen (almost) transformed to Water, Flame, and Air,
So well you answer all Phenomena there; (ll.197—202)

(大意：この尊大な捕まえにくい神が逃亡を謀るときは、あなた達が人類を楽しませるときと、別に変った姿になるのではありません。(正体を隠して)水、火、風同然になったようですから、あなた達は全の現象にうまく答えるのです^{b)})

姿を無名の人間にやつす以外に手段がない敗北者の無能振りと古典的原子論が重層している。Wits に対する憎悪というよりも嘲笑(これだけでも諷刺の意味は少くないが)これに加えて、古典的素朴な知識の勝利(the Great Unknown の勝利の暗示も含めて)を謳歌する。

ここから、流行の新興学問の無効を揶揄することに集注する。

Tho' Madman and the Wits, Philosophers and Fools,
With all that Factious or Enthusiastic Dodards dream,
And all the incoherent Jargon of the Schools,
Tho' all the Fumes of Fear, Hope, Love, and Shame,
Contrive to shock your Minds, with many a senseless doubt,
Doubts, where the Delphic God would grope in Ignorance and Night,
The God of Learning and Light
Would want a God Himself to help him out. (ll.203—10)

(大意：気違いと才人、哲学者と阿呆は、反政府派すなわち熱狂的宗教信者の愚者が夢みる幻を追い、学者連中の筋の通らぬ馬鹿な意見にうつつをぬかし、不安と希望と愛と恥の香煙をかかせ、無意味な疑問をならばは人の心を惑わそうとするし、デルフィの神さえ無知と闇夜に迷う疑問で惑わすにもかかわらず、学問と光の神(無名軽輩)であれば、逃亡のときにも一個の神で間に合うだろう)

逃亡にも新興学問は、役立たない位い現実から遊離しているという落ちが効いている。Swift の注によれば「神自身」は 'θεος απο μηχανης' つまり「機械神」(deu ex machina) であるから宗教劇の常套手段を活用すれば簡単に逃れるという含意も読み取れる。ここに敗軍の将と反政府運動、熱狂者という一連の反体制集団を集約してみせる。

この伝統的土俗的知恵を女神に喩え、飾らぬ美さを讃える。具体的で抽象化しない物の考え方を讃美する姿勢は、アリストパネスの「雲」を連想せしめる。ここに Athenian Society の提唱す moral があるのであろう。それ

故に、この道徳観の一致が創作の動機になっていることは既に触れた。

次に Athenian Society 「存在不明なるもの」「無名」の軸の imagery を検討しなければならない。

An unknown Music
Charming her greedy Ears
With many a heavenly Song
Of Nature and of Art, of deep Philosophy and Love,
Whilst Angels tune the Voice, and God inspires the Tongue. (ll. 52—6)

(大意：天然と人工、深い哲学と愛を歌う妙なる歌の、飢えた耳を魅了する、ききおぼえない楽の音、しかも天使が歌い手の声を整え、神が歌詞に靈感を与える)

こういう隠喩で登場し stanza III では、'The great Unknown and far-exalted Man' と呼びかけられている。「大そう気高い」所以は、宗教の点でも世界観の点でも、正統を信じているからである。「偉大なる無名」と対立しているのが、「当代の無神論者」'The Atheists of the Age' (l. 102) である。

And you who Pluto Helm does wisely shroud
From us the Blind and thoughtless Crowd,
Like the famed Hero in his Mother's Cloud,
Who both our Follies and Impertinences see,
Do laugh perhaps at theirs, and pity mine and me. (ll. 86—90)

(大意：盲目で思慮のない僕等俗物から、名高き帝王が母の雲に覆われていたように冥府王のかぶとに匿われているあなた達は、愚行と無法を目にしながらも、悪質な奴等の狼藉は嘲笑し、僕の善意の過ちは憐んでくれるでしょう)

正体不明 (unknown, empty sound) ないし無名ということが「見られないで見る」(see but unseen) という機能的あるいは戦略的利点に転調される。

stanza VI では

.....all the Praises it can give,
By which some fondly boast they shall for ever live,
Won't pay the Impertinence of being known;
Else why should the famed Lydian King,
Whom all the charms of an Usurped Wife and State
With all that Power unfelt, courts Mankind to be Great,
Did with new, unexperienced Glories wait,
Still wear, still doat on his Invisible Ring. (ll. 149—57)

(大意：(馬鹿な真似がもたらす) どんな称讃も正体がばれる過ちを償いはしない。(名声こそが生がいとろそぶく馬鹿もいます)。もしそうなら、かのリディアの王は、世人も大物になると思うほどの、はかり知れない権力をもち、篡奪した王妃と王国の魅力をつくして身につかぬ栄光も添えて仕えられたにもかかわらず、どうして姿を消す指輪をはめて、それを大事にしたのでしょうか)

と悪党にとっての無名の効用を説き、stanza VII では名声が唯名論的なものにすぎないことを描く。この無名の偉大な価値は、生命は勿論、名声さえも空しい以上、何よりも貴いという逆説的論理を展開する。

Far above all Reward, yet to which all is due,

And this great Unknown is only known in You. (ll.187-8)

(大意：すべての報酬にかえがたい、もっとも、何事も報酬しだいですけれど、この無名の偉大性はあなた達に分っているだけです)

これは Atheian Society が受けうる最高の讃辞ではある。しかし、反語的響がなくもない。

そこに、既に触れた女性論への不満が爆発するのである。

Rather forgive what my first Transport said,

May all the blood, which shall by Woman's scorn be shed

Lye on you, and on your Children's Head. (ll. 243-6)

(大意：はじめに感激のあまり申し上げたことはなかったことにして下さい。女の侮辱で流れる血潮があなた達の体と、お子達の頭にたっぷりとかかりますよう)

と声を荒げて怨む。女性論を「残酷な無名」(1. 242)の背信行為に擬しているからである。怨嗟の声は無常観を訴え、人の命と営為のはかなさを歎き、既に引いた逆説の真理、「無名礼讃」に至るのである。

洪水=戦乱の軸の imagery では洪水の隠喩が時事論を展開するためであることは明白である。Pindaros の Ode 作製の契機が古代オリンピックの勝利者への頌辞を唱うためであったとすれば、時事的題材を盛り込むことはこの形式の慣習であるのかも知れない。もう一つの軸 Athenian Society =無名の偉大性においても同様であるが、主要主題が、新しい副主題の必要に応じて、微妙に変転することも指摘しておくなくてはならない。枠組をなす二つの主題に変調を起させるものは、既に、いくども述べた政治と学問におけるこの時代の混乱である。少なくとも、Swift にとって、進歩の先駆というよりも混乱の原因と思われるものが、枠組の主題よりも、題材としては重視されていると言うべきかも知れない。その結果、詩は、各部ごとに、特殊な主題を持ち、諷刺の興味は高まる。これは利点であるが、一方、集約的な結像作用は妨害される弊害がないでもない。

4

二つの主題的と Imagery 副主題的諷刺の対象が常に交錯するとすれば、十二の stanza に書き分けられた全体ではどのように構成しているであろうか。各 stanza の内容を簡単に類別すれば次の表が得られる。(有を○で示す)

stanza	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
deluge	○	○						○				
society		○	○	○	○	○	○			○	○	○
satire			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

ここから、敢えて言えば、Swift の短期間に仕上げたという証言を信ずれば、¹⁶⁾諷刺的関心が既に蓄積されていて、戦乱と勝利、the Athenian Gazette の閲読が創作の筆を刺戟したと考えるべきであろう。

諷刺とはある価値観に立って、他の価値観を攻撃することにはほかならない。Swift の基本的立場について J. M. Murry が、それは Sir William Temple に体現された価値観であるというのは否定できない。

He is the enemy, equally, of the modern speculative philosophy. True philosophy, for him, is moral philosophy, and that consists in a just sense of values, freed of all pedantry and super-subtlety: the recognition and pursuit of that reasonable and human virtue he finds personified in

¹⁷⁾
Temple.

この詩の基本的方法は、視点と対象の両者を微妙に変化させ、攻撃に必要にして十分な両者間の相対的距離を設定することと言えるであろう。

A Tale of a Tub の修辞について I. Ehrenpreis の批評が指摘することは、この詩においても妥当と言える。
At the source of his incandescence there is not a consistent persona but an ironical pose, which wins its literary effect only to the degree that it is seen through. (my italics)¹⁸⁾

Notes

1. The *Ode* was published in the *Supplment to the Fifth Volume of the Athenian Gazette*, (London, 1 April 1692).
Swift 自身詩に添えて編集宛の手紙を付けている。その中で、「ある学識と身分の高い人ならびに小生の知友数人に閲読を賜りましたところ、(世間のまぶしい光に馴させるのがよいと思いましたので) 確かに出来ばえはかなりのものだから、次号発刊の前に、貴殿に発表をお願いしてみろとの好意ある批評を得た次第であります」と自信を披歴している。
2. J. M. Murry : *Jonathan Swift* (New York, 1955, 1967) P.38
'The Athenian Society was a group of anonymous contributors whom an enterprising and eccentric bookseller, John Dunton, had gathered together to answer all sorts of queries propounded to them --mainly on points of moral conduct-- in the *Athenian Mercury* (sic) which was thus a kind of anticipatory cross between the *Tatler* and the *Gentleman's Magazine*.'
3. 'Censure's to be understood/Th' Authentic Mark of the Elect' (11. 91—2)
4. 'Then tell us what is Fame' where shall we search for it?' (1. 175)
5. 'And you with fatal and Immortal Wit conspire/To fann th' unhappy Fire : /Cruel Unknown! what is it you intend;' (11. 240—2)
6. Murry, J. M. *ibid.* P.40.
7. 'Let the vain sex dream on, their Empire comes from Us.' (1' 260)
8. 'Yet shall these Traces of your Wit remain/like a just Map to tell the vast Extent/of Conquest in your short and Happy Reign;/And to all Future Mankind shew/How strange a Paradox is true,/That Men, who lived and died without a Name,/Are the chief Heroes in the sacred List of Fame.' (11. 301—7)
9. *Ode to the H. Sir William Temple*, 'You strove to cultivate a barren Court in Vain/Your Garden's better worth your noble Pain,/Hence Mankind fell, and here must rise again./' (11. 15—7)
10. Murry, J. M. *ibid.* P.40.
11. Donoghue, D. ed. *Swift Revisited* (Cork, 1968)
12. *ibid.* P.80, 'His mind works best in the juxtaposition of small units, in strict balance and adjudication, where every change of direction is under minute control.'
13. *ibid.* pp. 81—8

14. Ashley, M. *England in the Seventeenth Century (1603—1714)*, (London, 1958) P. 182, & Swift, J. *Ode to the King on his Irish Expedition*.
15. 'universal' は 'particular' に対峙すべき語である。抽象的哲学(観念論)にふけり、具体的な生き方(倫理道徳)を等閑視する流行を揶揄している。
16. Harold, W. ed. *Correspondence of Jonathan Swift*, 'Swift to Thomas Swift,' P. 8, ...and truly I make bold to employ them that way (i. e. 2 hours writing poetry) and yet I seldom write above 2 Stanzas in a week I mean such as are to any Pindarick Ode, and yet I have known my self in so good a humor as to make 2 in a day, but it may be no more in a week after, and when all's done, I alter them a hundred times, and yet I do not believe my self to be a laborious dry writer, because if the fitt comes not immediately I never heed it but think of something else, and besides, the Poem I writt to the Athen. Society was all ruff drawn in a week, and finished in 2 days after, and yet it consists of 12 stanza and some of them above thirty lines all above 20, and yet it is sowell thought of that the unknown Gentlemen printed it before one of their Books... (my italics)
17. Murry, J. M. op. cit. P. 41
18. Ehrenpreis, I., *Swift the man, his works aud his age*, P. 167
 - a) 1.190, 'Querist' の 17, 8 世紀の社会的背景について, *OED* の初例 '1633 Earl Manch, *Al Mondo* (1636) 147, Those Querists who must have a reason for every thing in Religion,' は示唆的である。
 - b) 1.202 の 'All Phenomena' には inconstant, unsubstantial, false, visionary の含意がともなう。同時に 'a highly exceptional or unaccountable fact or occurrence' の意味も附随しているのではあるまいか。但し *OED* は '1771. *Junius Lett.* lvii (1772) II. 257 From whatever origin your influence in this country arises, it is a phenomenon in the history of human virtue.' を初例としている。